開発や基準の改正が頻発する外資で身につくスキル」、そして「少人数ゆえに仕事の幅がとても広いベンチャーの世界が鍛えてくれた技能」という、３つに分類できます。

現在勤めるパイオニア DJ(株)は、クラブやライブイベントでプロのＤＪに使われるプレーヤーやミキサー、コントローラーなど、DJ 機器を製造・販売している会社です。私はこの会社でエグゼクティブディレクターの職にあり、CFO（最高財務責任者）を務めています。少し具体的にいうと、私はいま、経理・人事・法務・IT 分野を統括しながら、５～10 年後を見すえた会社の構造改革、業務フローの再構築などを担当しています。業務の DD（Due Diligence、適正かつ詳細な調査分析）を通して、全社的な方針を策定しながら予算編成などを改善するのが仕事です。いまは外部の知見を積極的に取り入れるために、採用や社員教育が急務だとも考えています。

一般論として経理パーソンの重要な役割は、まずキャッシュフローを正確にモニターすること。黒字倒産など決して起こしてはなりません。そして会計基準や法令、社内規則などのルールを守りながら正確に、そして迅速に帳簿を締めます。経理の世界では「ルールなくして正確な帳簿なし」と言われます。さらにこの仕事ではスピードが大切です。企業活動のすべては数値化されます。この数値をもとに、CEO（最高経営責任者）や COO（最高執行責任者）に経営のアドバイスをするのですが、このタイミングが重要です。経営者の中には勘や感覚で舵取りをする人がいます。また一方で、営業やサポートセンターなど社内の各部署からは、業務改善のためにもっと予算や人がほしいという声がつねに上がります。これらの利害を調整し優先順位付けし、会社のバランスをとるバランサーの役割を果たすのが CFO 仕事の一つです。

世の中にはともすれば、「経理は数字を生み出す責任が軽い気楽な現場だよね」、という誤解があります。事実、帳簿をつくるだけで満足してしまう経理パーソンも多いのですが、とんでもありません。CFO には、経理の数値を見極めながら、成長する部門にどのくらい予算をつけるべきかを判断する重大な責任があります。そのために情報収集能力を磨きながら日々の勉強が欠かせません。さらに加えて、CFO にはトップの不正を許さない高度な倫理観が求められます。大きく言えば、CFO の役割と責任は、数値を元に各所をモニターし、ブレーキも踏む準備をしつつ「企業価値を最大化すること」。これにつきます。

日系の大企業のメーカーと外資系ベンチャーで転社をしてきた私は、自分は日系大企業（メーカー）にはなじめないな、と思うようになりました。年功序列で団結力の強い日系大企業にはすぐれた点もありますが、私としては、自由闊達で多様性が高く、決定が速くて金銭のインセンティブも多い外資系ベンチャーに惹かれます。思いついたらすぐ行動に移せて、その成果が自分に返ってくる。幹部には大きな権限が与えられ、そのぶん大きな責任を背負います。外資系ベンチャーでは、日本企業のように、経理パーソンに向かって「キミは明日から営業部に異動してもらう」などということはありません。新卒を育てるよりも即戦力を中途で採用する外資系ベンチャーでは、そもそも社員ひとりひとりがその道の専門家なのです。

「Think simple, Act faster」。複雑で高度な判断を迫られる毎日の仕事の中で、いつしかこれが私のモットーとなりました。

人間がその一生でいちばん時間を費やすのは仕事です。だから自分がほんとうにやりたい仕事に楽しく打ち込みたい。私はそう思うので、プロとして、自分で限界を決めずに仕事に取り組みたいと思います。もちろんそれは、家族や家族と自分との時間を犠牲にしろ、ということではありません（ちなみに妻は商大の同期生です）。会社を選ぶ「就社」ではなく、その道のプロとしての仕事を選ぶのが「就職」です。そういう就職をかなえることが、家族とともに「自分の人生を自分でコントロールする鍵」になります。

「農業におけるビジネスマインド～めげなければなんとかなる」
中村 好伸 氏（昭和 62 年管理科学科卒／新篠津つちから農場株式会社代表取締役）

○自分の芝生は、自分で青くしよう

私は新篠津村（石狩管内）で、新篠津つちから農場（株）という農業法人を経営しています。昭和の終わり近くに商大を卒業して、まずニッカウヰスキー （株）に就職したのですが、それからいろんな仕事を経験して現在にいたります。先輩や友人たちから、「中村大丈夫か？」と心配された時期もありました。でもいま、自分がほんとうに好きでやりたいことに取り組みながら、なんとかなっています。今日はその回り道についてお話しします。伝えたいのは、「めげずに続ければなんとかなる」、ということです。

私は体験的に知りました。辛いことがあってもめげずにがんばっていると、神様がどこかで見てくれていて、少しだけ助けてくれるのです。でもめげちゃうと、神様の視界からふっと消えてしまう（特定の神様の話ではありませんよ）。皆さんも卒業して仕事につくと、とにかくいろんなことにぶつかります。今日は、進路を選ぶときに参考になる、世の中の見方や考え方が提供できたら良いと考えています。

卒業した 1987（昭和 62）年はいわゆるバブル経済で、世の中すべてが右肩上がりに動いていました。銀行や生保、損保など、何社もの大手企業から内定をもらっている仲間が珍しくありませんでした。私が選んだのは、ニッカウヰスキー。東京の南青山にある本社の経理部に勤めました。取締役くらいにはなってやる！そんな思いで入社しました。

ニッカは良い会社でした。品質の高いものを作っているし、家族的。若い社員にも仕事を任せてくれました。でも私は、５年でやめて北海道に帰ってきました。嫌なことがあったわけではないのです。生産現場の工場に行きたかったのですが、経理なのでずっと内勤です。営業職になれば営業所のあるまちで偉くなるという進路もあったでしょう。でも疑問に思ったのです。何カ所か転勤して、そのあと将来東京に戻りたいだろうか、と。東京は自分の居場所ではないと思いました。そしてとりあえず北海道に戻ってみようと思ったのです。生まれ育った北海道でなら、自分の居場所があるはずです。

当時高島（小樽市）にフィッシャーマンズハーバーというレストランがありました。そこが冷凍刺身の宅配事業を新しくはじめることになり、その営業として勤めることにしました。そこは独自の冷凍技術をもっていたので、冷凍の寿司とか、のちには冷凍おせちとか、ユニークな商品を自社で開発していました（冷凍おせちはのちに遅配が大問題になったのですが）。

はじめての営業職で、飛び込み営業です。残念ながら見事に売れませんでした。私はもともと内向的でシャイな人間です。千歳空港のショップを一軒一軒まわろうと空港に行ったものの、飛び込む勇気がわかずに空港の中を半日うろうろしていたこともありました。そんな調子だったので、やがてこの事業は中止。使えないやつ、というレッテルを貼られてしまいました。夢と希望にあふれて帰ってきましたが、挫折でした。

次は、ゼミの先輩が手を差しのばしてくれました。先輩は小樽でラーメンの製造販売の会社を経営していたのです。北海道物産展で本州のデパートなどをまわりました。ブース販売で、自分のシャイな殻を少しは破ることができた時代です。どうしたら立ち止まってもらえるか、どうしたら人を集められるか。やがて買ってくれる人とそうじゃない人が見分けられるようになりました。顔はブースを向いていてもつま先が横を向いていたら、その人はまず買いません。逆も真です。つま先が横を向いている人に話しかけて立ち止まらせると、ほかの人も自然に寄って来ます。おもしろいことに、人がいると人は寄ってくるのです。そして主婦が大好きなのが、詰め放題。自分でシミュレーションして、めいっぱい詰めて５袋、それで赤字にならないような値付けをします。ところが始まってみると、破れる寸前で６個も７個も詰める人がいる。恐るべき執念です（笑）。前任者の倍くらいの成績があがるようになりました。

このラーメン営業の時代に、思わぬ形で農業とのつながりが生まれます。皆さんの世代ではあまり知らないと思いますが、栗沢（岩見沢市）で自然志向の暮らしを手作りで実践している河村通夫さんという人がいます。建築から庭、料理など、独特のセンスとすごい技術をもっています。食や園芸資材など、自分の名前を冠した商品を開発しています。もともとはシンガーでススキノでライブハウスを経営していました。現在まで 30 年くらいラジオパーソナリティもしています。この河村さんのところに、ラーメンを共同で開発しませんか、と会いに行きました。何度か会っているうちに、中村君、俺のところ（株式会社創芸の会）で働かないか、という話になりました。よしやってみよう。そう決めました。

といってもふつうの会社ではありません。私はいわば弟子みたいなスタッフです。お金も、給与ではなく生活費。米や野菜は自給自足ですから、生活費はそれほどかかりません。といっても暮らしていくのに現金は必要ですから、経済的にはとても厳しくて、家族には苦労をかけました。現金収入は、子どもの小学校の給食費が免除になってしまうくらいのものだったのです。嫁さんも「大丈夫かこの人？！」と思ったでしょう。しかしなんとかついてきてくれました。彼女は商大の同級生で、妹背牛の農家の次女だったので、農業に対する抵抗をもっていなかったのが救いでした。

32 歳から 38 歳まで、河村さんのもとでとにかくいろんなことをして、得がたい時間をおくりました。本格的な農業に出会ったのもこの時代です。でもこのままずっと居続ければ、一生河村さんの世界で生きていくことになる。やがては自分の世界、自分の本当の居場所を自分で作らなければならないと考えていました。40 歳ちょっと前。高校や商大の同期の多くは、有名な会社でバリバリ働いています。高校（札幌北高校）の同級には医者や弁護士もいる。一方で自分は毎日畑で草むしり。自分でも「大丈夫か中村？！」と問いかけることが増えていきました（笑）。

河村さんに感謝しながらも、次の一歩をどうするか？ いろんなことをやった中で、いちばん好きだったのが農業でした。人は好きなことをやっているとき、たとえ悪戦苦闘していても、苦しいとは思いません。がんばっていることを特別な努力とは思いません。苦しんでいる人ほど、自分はがんばっている、努力している、と思うでしょうけれど。特別負けず嫌いでもなく、努力家でもない私です。歯を食いしばって努力を重ねる、といった才能がない私にできることは、自分が楽なこと（のんびりサボっていられる、という意味ではないですよ）。それが農業だったのです。

○自分の居場所を見つけたら、めげてなんていられない

農業をしよう。でもどうやって？ 元手も伝手（つて）もありません。

私は、後継者のいない農業法人に入社しようと思いました。そうして見つけて入ったのが、いまの会社の前身、新篠津村の有限会社佐藤農産です。2012 年のことでした。社長はとてもすぐれた技術をもつタマネギ生産者でした。私はプロ中のプロの技術を教わってはやく一人前になりたいと張り切っていました。

しかしです。河村さんのところでひととおり畑仕事を覚えていた私ですが、プロの目からはしょせんアマチュア。大事なことを何も教えてくれず、機械の運転など重要なことはさせてもらえません。40 代半ばに近づいても、来る日も来る日も、草取り（有機栽培なので除草は手作業です）と配達ばかり。社会の一線でバリバリ活躍している同期たちの顔がまた浮かび、広がるばかりのその差にあせります。しかし愛する子どもを３人かかえて、いまさら転職はできない。私は、教えてくれないなら、まわりの農家など、誰彼かまわず技術を盗もうと決めました。機械の扱いから肥料の撒き方、トラックのロープ結びまで、人がやるのを見て、聞いて、本で調べ、自分で練習しました。

そんなあるとき、地域の慰労会に温泉に出かけた社長が、風呂場でころんで肩の腱を切る大けがをしました。すぐ長期入院です。仕事のやりくりはすべて私が担うことになりました。

「それ見たことか。あいつなんかに任せられない」などとは、絶対に言わせたくありません。毎日必死で

した。三日にあげずに病床に通って指示やアドバイスを受けながら、私はなんとか実務を取り仕切り、少しずつ自信がついていきました。

そうした成果が認められて、2008 年に法人の社長になり、2013 年には先代から法人を買い取って、文字通りの農場主となりました。「めげなければなんとかなる」のでした。

先代社長から法人を買い取るときにも、いろんな気づきと学びがありました。まず農協に行って融資を申し込みましたが、取りつく島もありませんでした。農協の上部組織の信連や、役場や道庁に相談してもらちがあかない。もうだめか、と思ったらそこで終わりです。いろいろ調べるうちに、日本政策金融公庫を知りました。はたして相談に行くと、「はい、融資できますよ」、と。エッ、ほんと？！と思いました。農協などは徹底した土地担保主義ですが、そこはあくまで融資先の返済能力を基本に見るのでした。

さて今日のテーマになりますが、私がめげなかったから、親方が風呂場で転んでくれました（笑）。このままじゃ先行きおぼつかないな、とあきらめていたら、いまの私はありません。ここが自分の居場所だと確信したら、石にかじりついてもとにかくがんばるしかない。皆さんも会社勤めをしたら、必ずこんなことを言いたくなります。「上司にめぐまれないから自分は伸びない」「あいつは良いクライアントを引き継いでいるのに自分は…」。でもそんな言い訳は通じません。続けようと覚悟を決めるからこそ、壁を乗り越える知恵も湧いてきます。私の場合は家族がいたから、石にかじりつくしかなかった。そうしたら神様が気づいてくれた。ここが自分の居場所だと信じたら迷わない。「めげなければなんとかなる」。私は、「あきらめないこと」が自分が持っている数少ない才能なんだ、と確信しました。

「新篠津つちから農場」という名前は、「土」と「力」からできています。「土力」は「どりょく」とも読めます。うちでは先代の時代から、有機栽培と特別栽培でタマネギをつくって販売しています。

私が社長になり畑も売上も拡大してきました。でも売上（今年度で約 2.6 億円）を伸ばすことが事業の目的ではありません。私たちの目的は、当社のタマネギを食べた人、料理に使った人が満足することにあります。私の好きな言葉があります。「Warm Heart, Cool Head」。人間の営みのすべての基盤はハートです。でもハートが命じるままに突っ走ってはいけません。もうひとつの要素、冷静な頭脳が欠かせないのです。私はただやみくもに、ハートが命じるままに「めげずに続けた」わけではありません。クールな思考を持ちながら、ときどき休んでも良いから「めげずに続ける」。そうすれば神様はきっとあなたに気づいて助けてくれます。

“A wonderful world through learning English”（英語で広がる楽しい世界）

外園知代 氏（昭和 57 年商学部教員養成課程卒／主婦）

〇忘れられない思い出

今日は、私が英語を通して学んだり経験したことを、短いトピックを連ねながらお話したいと思います。

商大生の時、北大の交換留学生が集まるパーティに行きました。そこで、マサチューセッツ州のアマースト大学（クラーク博士の出身校です）から来ていたハン・グーンさんという方と友達になりました。母が彼を我が家にお招きしましょうと言ってくれ、彼は遊びに来てくれました。私はお琴を奏でたり、お茶を点てたりしておもてなしをしました。とても喜んでもらえました。最近（４０年たって）フェイスブックで、彼がとても活躍していることを知り、嬉しくなりました。文通の時代からインターネットの時代へ。技術の進歩には驚かされます。

商大を卒業する直前、父の親友の大学教授やその教え子たち数人と、ヨーロッパを旅しました。初めての海外旅行でした。イギリスに向かう飛行機では隣の座席のインドの女子学生と、音楽や文学色々な会話を楽

しみました。

日本の外で見聞を広めると、日本での暮らしを広い視野、色々な角度から見られるようになると思います。国際交流団員として、訪れたアメリカとカナダでは、印象深い場所がいくつかありました。ひとつは、非行をおかした少年少女のための寄宿形式の学校です。また英語を母語としない大人が、英語や職業技術を無料で学べるコミュニティ・カレッジ。そして、食品メーカーが型落ちの製品などを寄付して、食べ物に困っている人達に提供するフードバンクのシステム。商大生の中にも小樽で「こども食堂」の運営に加わり、頑張って下さっている方がいらっしゃるそうでとても嬉しくありがたく存じます。また老人施設も強く印象に残っています。入居者が寂しくないように、住宅街の中に普通のお家と隣接して建てられています。若い時活躍した環境を思い出せるようにオフィスのようなスペースがあったり、楽器がいろいろあって自由に弾けたり。特にアメリカらしいと思ったのは、色々な言葉を話せるスタッフがいて、スペイン風、メキシコ風、イタリア風というように入居者の出身地に合わせてお料理も選べる点です。「お料理と言語」。これは人が生きていく上でとても重要なエレメントだと思います。

科目等履修の英会話のクラスにベック・キョンユンさんという韓国からの素晴らしい留学生がいました。彼は徴兵で 2 年間、しかも朝鮮半島の北緯 38 度線（北朝鮮との境界）近くで重い銃を抱えて任務についていたこともあり、とても 20 代半ばとは思えないほどしっかりした学生でした。さらにオーストラリアに留学していたことがあり、英語も堪能です。日本語も、尊敬語、謙譲語、丁寧語と完璧でした。礼儀正しく時間にも正確で、スキーに初めて挑戦したのですが、あっという間に上達してしまうほど運動神経も抜群。多岐にわたる話題を英語で話し合いました。

ある日、彼は、私の英語の教科書をコピーさせてほしいと言いました。

「もちろん、どうぞ。」

同じグループの中国人留学生も教科書を持っていないことを知っていましたので、

「彼の分もコピーしましょうか？」と尋ねますと、「いや、彼からは頼まれていないのでその必要はない」と答えました。日本人なら、最近の流行の言葉で言えば忖度（そんたく）しがちですが、この合理的な判断に、ショックを受けたというか目からウロコが落ちた気がしました。

彼が帰国する時に、この 1 年間の小樽商大での印象を尋ねますと、こう答えました。「とても楽しく勉強でき、健康で、皆さんに親切にしていただき、とても良かったのですが、残念なことがひとつだけあります」と答えました。

私は心配して「残念なこと？それは何？」と尋ねますと「困難に直面し、それを克服するという経験ができなかったことです」と言うのです。

これには心底驚かされました。そんな発想は私には全くなかったからです。いつも困難なことと出合わないように願い、回避し、逃げようとしていたからです。「若い時の苦労は買ってでもせよ」と言います。どうぞ皆様もこれから困難なことと出合いましたら、逃げたりせずにチャレンジなさって下さいね。

〇英語は人生を豊かにしてくれるツール

小樽商大は「北の外語大」と言われたほど、語学教育に熱心で素晴らしい先生方がたくさんいらっしゃいます。社会に出てから英会話学校に通おうとしても、時間を捻出するのが大変ですし、とてもお金がかかります。どうぞ商大にいる間に英語の力をつけて下さい。小樽にはたくさんの外国人観光客が来ます。私は「雪あかりの路」などでボランティアをしていますが、そういう機会を活かせば、生きた英語が学べます。また、豪華客船が入港する時もチャンスです。観光ガイドのボランティアにも是非挑戦してみて下さい。皆様のお好きな小樽のスポットや、行きつけのお店のことなどを教えてあげると、とても喜んでくれます。また、ニュージーランドのダニーデン市は小樽の姉妹都市ですが、姉妹都市事業に関わる色々な催しがあります。こ